



「輝いている」

ホームから降りた私たちが見たものは会社帰りの人 家路を急ぐ人 そんな何も変わらない日常 そこにある紛れもない何も変わらない日常 少し戸惑ってしまった私は三日前に見上げた 銀の時計を見た 『どんな時間が お前に流れたのか?』と 『まるで夢のような そんな時間だった』と 行きよりも 少し重くなったカバンを 持ち直しそう答えた みんなと別れ 一人になり 少しくつ何もう変わらない 日常に戻っていく自分が さみしく感じた 何もなかったように 夢のように 思える自分がさみしく 感じた

しかし過ぎ去った時間が こんなにも いとおしく思えるのは その時間が私たちにとって 一生消えることがない 共有された時間となって 輝いているからではないか



修学旅行 6月8日~10日

